

1．これまでの経歴

学部卒業後に、建設コンサルタントに入社し、今年で10年目となる。入社後は、数値解析系の業務や計画系の業務も行っているが、主に北海道内の農業水利施設に関わる構造物の設計を担当している。

2．大学で習得してきたことと、現場技術者としてのギャップ

担当分野が構造物の設計という分野であることから、大学での講義科目そのものと現場技術者としてのギャップというのは、大きなものではなかった。しかし、大学で習得してきた学問(設計)と、その結果(現場)のつながりについて認識が浅かったということが、ギャップとして感じたことである。

教科書どおり設計(計算)を行う、ここまでは大学の講義と特に違和感はなかった。それが、構造物となり、工事が着工し、実際の構造物として完成したとき、これまで机上で習得してきたことと現場がつながっていることを、漠然とではなくはっきりと認識できた。それまで、大学の講義から入社後しばらくは、構造力学なり水理学といった各論を習得してきたが、結果を知らずして習得してきたため、各論の習得度合いそのものが浅かったのである。このことが、現場技術者として初めて感じたギャップである。

我々コンサルタントに対して施工業者の方々から「現場に応じた設計になっていない」という厳しいご指摘を受けることがある。これは、我々が現場を理解せずに机上の理論だけで設計を行ってしまうことが原因のひとつだと考えているが、大学教育が設計現場、施工現場が結びついているかどうかということにも通じると思われる。

農業土木学とは、これまで現場に必要な実学として発展してきた。ところが、学生にとって農業土木学が現場と直結した学問であるということ認識できる講義内容となっているだろうか。大学での講義内容が、大学入学までの詰め込み型受験勉強の延長であるように認識される内容とならないように留意する必要があるのではないだろうか。

3．大学ではどのような科目をどのような内容で講義すべきか。

前述したとおり、構造物の設計分野に携わるものとしては、講義科目そのものは満足できる内容であったと感じている。しいて挙げるならば、構造物の基礎となる地盤工学的な科目の充実を期待するところである。

4．演習・実習としてはどのような内容を教えるべきか。

近年、農業土木学も時代の多様なニーズを反映し、環境学系や生態学系の技術等、多様な技術の習得が求められている。しかし、学部における教育では農業土木学の基本的な学力の習得を期待したい。今後の多様なニーズをにこえるためにも、専門的基礎学力の習得が不可欠である。そのためには、各講義で学んだ理論が現場に必要な実学であること、すなわち専門的基礎学力であるということ認識し、その各理論を用いる方法を習得するた

めの演習を設けてはどうだろうか．

たとえば，水利施設に関わる設計を行い，構造力学・土質力学・水理学といった各理論が，現場ではどのようにして生きてくるのかを習得するといった演習である．

ひとつのテーマに対する結果までのアプローチ・理論の構築方法・評価方法といったことを卒業論文をとおして習得するのに対し，農業土木学の全体を把握し，実学として講義で習得する各理論があるということ認識するためにも有効な手段ではないだろうか．